森林レンジャーがゆく（30）

あきる野の哺乳類

乙津でみられたクマ棚

今年は、西多摩地域で人里にクマが多く出没しています。市内でも、7月に上養沢で目撃され、その後も9月にクリの木に登ってクリを食べているクマが目撃されるなど、小宮地区を中心に目撃情報や果樹の採食痕が確認されています。

クマは、クリの木の幹の上まで上がり、周りの枝を器用に折り曲げて枝先のクリをとって食べ、その枝を自分の尻の下に押し込んで次の枝を引き寄せます。クリを食べ続けると、沢山の枝が尻の下に敷かれて大きな鳥の巣状の枝の塊ができ、それは「クマ棚」と呼ばれ、採食痕としてクマの生息を確認するサインです。この痕跡は、小宮地区のクリの木でも確認されており、確実にこの地域までクリを食べに来ています。

冬に備える生き物たちにとって「クリ」は重要な食べ物で、まだ暑かった9月の中旬あたりから、小宮周辺でニホンザルがクリを食べた食痕も多数確認されました。サルはクリを枝ごと切り取り、その枝を持って安全な所に運んで食べます。たぶん、クリのイガが痛いので、枝をつけた状態で持ち運んでいると考えられます。

また、クリの話ではないのですが、畑を荒らすイノシシを罠で捕獲したという話も多く耳にしました。確かに山間地域では人と多くの野生動物が隣接して暮らしていますが、昨年の秋と比べると明らかに人里での目撃や痕跡が増えています。これは生息数が増えたというより、山での食べ物が今年は非常に少ないからと考えられます。

特にミズナラは、昨年が大豊作で、馬頭刈山周辺の尾根道でも、イノシシが落ち葉の下のドングリを拾いながら歩いた食痕を頻繁に目撃しました。今年は、これらの尾根道でイノシシの食痕を目にしません。ミズナラなどは2年置きに豊作となるので、今年は不作の年となり、その結果イノシシやサルなどが例年より早い時期に人里で確認され、さらにクマも人里に下りてきたようです。

（杉野）